

令和7年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

指導	令和7年岩手県産水稻の生育経過の特徴と作柄・品質に影響した要因の解析
<p>【要約】 6月第2半旬から出穂期頃まで、県内は高温で経過したことにより生育が促進され、出穂期は平年より2日早まった。穂数やm^2籾数は平年を下回ったが、登熟期間中はやや高温で経過し、登熟歩合が高まったこと等により、収量は平年比99%と平年並となった。また、うるち玄米の1等米比率は96.6%（令和7年11月30日現在）と直近10年間の平均値を上回った。これは、出穂後の気温が過去2年間で比較して低く推移したことにより、白未熟粒の発生が低下し、整粒歩合が向上したためと推察された。</p>	

1 背景とねらい

高品質・良食味米の安定生産に向けて、当該年の生育状況について気象経過や土壌、病虫害等との関連について解析し、水稻生育経過と作柄・品質の成立要因を明らかにする。

2 内容

(1) 生育経過

- ア 5月第5半旬は低温寡照であったことから、活着・初期生育に遅れが一部でみられたが、6月第2半旬以降高温で経過し、生育は良好であった。
- イ 6月下旬の稲体窒素濃度はやや低く、窒素吸収量は平年並、土壌中の窒素含有量はやや低かった。乾土効果による土壌窒素発現は平年並と見込まれたことから、追肥について「ひとめぼれ」「あきたこまち」「いわてっこ」「銀河のしずく」は幼穂形成期に、「金色の風」は減数分裂期に、生育量に応じて窒素成分1～2kg/10aを基本としたが、稲体の窒素濃度はやや低く推移した。
- ウ 6～7月が高温で経過したことで幼穂形成期、出穂期ともに平年より早まった。出穂盛期は県全体では8月1日（平年差-2日）となったが、地域によっては平年より4～7日早い場合もあった。また、8月から9月上旬の出穂・登熟期間はやや高温となり、成熟が促進されたことで、成熟期は県全体で6日ほど早まった。

(2) 収量及び収量構成要素の特徴

高位節における分けつの出現停止や、穂への有効化率が低かったことにより、穂数が平年を下回り、一穂籾数も平年並みであったことから、 m^2 籾数は平年より少なかった。なお、玄米千粒重や登熟歩合がやや高かったことから、収量は概ね平年並（診断ほ：平年比99%）となった。

(3) 玄米品質等の特徴

- ア 1等米比率は96.6%と直近10年の平均値95.6%（H27～R6）より高くなった（令和7年11月30日現在）。2等以下に格付けされた主な理由は、着色粒（58.1%）、整粒不足（12.7%）、被害粒（11.8%）であった（令和7年10月31日現在）。
- イ 令和5、6年と比較し、出穂後の平均気温が低く推移し、 m^2 籾数も平年を下回ったため、白未熟粒率が減少し、整粒歩合が向上した。
- ウ 稲体窒素濃度がやや低く推移したことから、玄米タンパク質含有率は平年並みとなった。

(4) 次年度以降の主な対策

- ア 安定的な収量を得るため、健苗育成、適正栽植密度での移植、移植後の適切な管理により初期生育を確保することで穂数・籾数を確保する。
- イ 基肥、追肥の適量、適期施用により稲体窒素含量を適正に維持し、高温登熟年においても玄米品質を確保する。

3 活用方法等

- (1) 適用地帯又は対象者等 県内全域 農業普及員、J A 営農指導員
- (2) 期待する活用効果 水稻の生育と作柄・品質の成立要因を明らかにし今後の技術対策に資する。

4 留意事項

全県を対象とした解析であり、各地域の実態と異なる場合がある。

5 その他

- (1) 関連する試験研究課題
(805-1100) 水稻作況調査と作柄成立要因の解析 [H14～R10/県単]
- (2) 参考資料及び文献等
 - ア 令和7年産水稻の収穫量(東北)(令和7年12月12日 東北農政局公表)
 - イ 令和7年産米の農産物検査結果(速報値)(令和7年11月30日 農林水産省公表)

6 試験成績の概要(具体的なデータ)

概要は別紙「令和7年(2025年)水稻作柄解析概略図」のとおり

【担当】○生産基盤研究部 生産システム研究室、生産基盤研究部 水田利用研究室
県北農業研究所 作物研究室、生産環境研究部 土壌肥料研究室